

氏名	孟 令禱	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第 6003 号	
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	日本語における名詞述語文の記述的研究 —運動を表す場合と形容詞の規定語をとる場合を中心に—	
学位論文審査委員	教授 宮崎 和人	准教授 京 健治
	准教授 堤 良一	准教授 片桐 真澄
	元琉球大学教授 佐藤 里美	

学位論文内容の要旨

1. 目的

名詞は、人やものといった実体をさししめし、格のカテゴリーをそなえ、文のなかで主語や補語になるのが基本的であるが、述語になることもできる。そして、名詞が述語になる場合、実体の意味を失いつつ、主語にさしだされる人やものの属性を表すようになる。「太郎は学生だ」のような、主語にさししめされる人（もの）の《質》を表すものが典型的な名詞述語文であるが、そのほか、「太郎は優等生だ」「太郎は今空腹だ」「太郎は明日三時に出発だ」のような、《特性》《状態》《運動》を表すものがある。そして、名詞述語文には、主語と述語の二単語からなるもののほかに、さらに形容詞の規定語をとり、「彼はやさしい人だ」のように三単語からなるものがある。

本研究では、非典型的であり研究の少ない、「お客様がご到着だ」のような《運動》を表す名詞述語文や「彼はやさしい人だ」のような形容詞のかざりをもつ名詞述語文を対象として、語彙的・文法的・機能的観点から考察する。そして、《運動》を表すのは、基本的に動詞述語文であるが、名詞述語文もまた《運動》を表すとすれば、それは文法的な面において一般的な動詞述語文とどのような違いがあるのか、また、人や物を《質》の観点から特徴づけるのが名詞述語文であり、《特性》の観点から特徴づけるのが形容詞述語文であるとすれば、形容詞と名詞のくみあわせによって人や物を特徴づける文は一般的な名詞述語文と比べて意味と機能においてどのような特徴をもつのか、ということを明らかにする。

2. 序論

文の意味的なタイプという観点からの日本語の名詞述語文の研究は、佐久間鼎の研究から始まる。これは、研究史上、非常に重要である。演述文（平叙文）を「物がたり文」と「品さだめ文」に分類する佐久間の議論は、三上章に継承され、益岡隆志の叙述類型論に発展した。これらは名詞述語文における題述関係を重視する点に特徴がある。一方、奥田靖雄の述語の意味的なタイプの議論を出発点とし、それを踏まえて、高橋太郎、佐藤里美らが名詞述語文を記述した。そこで重視されるのは、主述関係である。奥田の述語の意味的なタイプに関する議論は、工藤真由美の時間的限定性の議論に受け継がれ、発展した。本研究では、奥田の研究の枠組みを継承し、名詞述語文の意味と機能について網羅的・体系的な記述を行っている佐藤の研究を継承し、発展させようとする。

3. 本論

第2章では、運動を表す名詞述語文を取り上げ、モーダルな意味の観点から、それらを認識的な文（叙述文）と意志表示的な文（命令文・勧誘文など）に分けて考察した。そもそも名詞述語文には、動詞述語文のような形態論的ムードがなく、述語の形で表し分けることができるのは、断定と推量のような認識的な意味だけである。したがって、意志表示的な文におけるモーダルな意味は、もっぱら人称性という構文論的手段に依存し、しかも、権威者である話し手が行動を決するような場面での命令・勧誘・決意にしか使用されず、依頼や希求などは表せない。

一方、認識的な文におけるテンポラリティー・アスペクチュアリティーについては、形態論的にはテンス対立があるだけで、完成性・継続性といったアスペクトの基本的意味やパーフェクト性・反復性といった派生的意味がどのように実現するかが問題になる。名詞述語文であっても、運動を表す限りはアスペクト的な意味から解放されないからである。考察の結果、完成性・継続性・パーフェクト性のいずれかを選んで実現する動詞が少なくないこと、非過去形と過去形のテンス対立は、基本的に現在と過去を表し分け、未来に関しては状況語が必要になること、このテンス対立と統一されているのは、継続性、パーフェクト性、反復性であること、動詞と同様、継続性における動作継続と結果継続の意味の実現には動作・変化という語彙の意味が関わっていること、完成性の意味の実現は限定的であり、テンスやムード、情報構造に条件づけられていること（テンスが未来か、ムードが変容しているか、述語が焦点から外れている場合）、などが明らかになった。

第3章では、人の特性の中心的な表現手段として使われる「彼はやさしい人だ」のような、形容詞の規定語をとる名詞述語文を取り上げ、それらの意味と機能について考察した。前半では、『分類語彙表 増補改訂版』や BCCWJ を利用した大規模な用例調査を通して、かざりの形容詞とかざられの名詞の語彙的な特徴や両者のむすびつきのタイプについて調査し、このタイプの文では、かざられの名詞は「人」をはじめ【主体／人間】に属するものが最も多く、かざりの形容詞は【精神および行為】（「やさしい」など）が上位を占めること、形容詞と名詞のむすびつきのタイプについては、中項目では【様相】と【人間】のくみあわせ（「いい人」など）が、分類項目では【人柄】と【人間】のくみあわせ（「やさしい人」など）が最も多いことを明らかにした。また、「男」「男性」「女」

「女性」など、出現頻度が上位の名詞や、「母親」「父親」「画家」「タレント」「職人」「弁護士」「刑事」「教師」など、家族関係や職業を表す名詞とくみあわせる形容詞についても調査し、結果を比較しながら、むすびつきのタイプの特徴を明らかにした。

この章の後半では、対象を「形容詞＋人だ」に限定して、このタイプの文のテキスト的機能について考察した。具体的には、このタイプの文が《説明の文》としてはたらくときの、それがつくりだす《説明的なむすびつき》のタイプや、《説明されの文》と《説明の文》の位置関係、「のだ」の必須性を調査した。その結果、「形容詞＋人だ」は主に《ひきだしの説明》としてはたらくこと、一方、《説明されの文》に後続し、《つけたしの説明》としてはたらくときには、「のだ」という明示的な形態論的な手段が必須であることが明らかになった。つまり、このタイプの文は、テキストにおいて、《本質的な特性》という意味と《ひきだしの説明》という機能の統一体として、人の特徴づけの重要な表現手段として使われているといえる。

4. 結論

以上、本論文では、徹底した用例の観察にもとづいて、運動を表す名詞述語文の MTA 体系が動詞の MTA 体系とどのように異なっているかを明らかにし、また、人の特性の表現としての、形容詞の規定語をともなう名詞述語文の意味的・機能的特徴を明らかにした。これらは、従来の名詞述語文の研究において十分な記述のないタイプであるが、時間的限定性の観点からの名詞述語文の総合的な研究においては重要な位置を占めている。今後は、状態を表す名詞述語文の研究を含めて、さらに発展させていく必要がある。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、1月29日（火）16時10分よりセミナー室2-1で開催した。審査委員は、学内では、指導教員の宮崎（日本語学）、副指導教員の京准教授（日本語学）および堤准教授（日本語学）と片桐准教授（言語学）が担当し、また学外より、名詞述語文の研究史において重要な位置を占める論考の執筆者である佐藤里美元琉球大学教授（日本語学）を招聘し、審査論文に対する客観的な評価をお願いした。

審査論文のバックボーンには「時間的限定性」という概念がある。これは、言語化される事象を一時的なものから恒常的なものへのスケールの上に捉えるものであり、この観点から、事象は〈運動〉〈状態〉〈特性〉〈関係〉〈質〉などにタイプ化される。このうち、〈質〉は名詞述語文にしか表せないので、名詞述語文の研究がそこを中心に展開するのは当然のことであるが、現実には〈質〉以外の表現にも名詞述語文は幅広く使用されており、それらを含めた、名詞述語文の意味と機能に関する体系的な記述を行う必要がある。また、研究の方法論として本研究が採用するのは、相互依存の諸様式の巨大な全体としての言語の、発話主体による実際的使用における機能を追究する体系・機能的アプローチである。こうした目標と方法論のもと、特に重要と思われる二つの課題に集中的に取り組んだのが審査論文である。課題の一つは、「お客様がご到着だ」のような〈運動〉を表す名

詞述語文におけるモダリティー・テンポラリティー・アスペクチュアリティー（MTA 体系）であり、もう一つは、「彼はやさしい人だ」のような形容詞の規定語をとる名詞述語文の意味と機能である。これらは、本論にあたる第二章と第三章で論じられている。審査論文は、これに加えて、日本語における名詞述語文の研究史を振り返ったうえで本研究の位置づけおよび審査論文の構成を示す序論としての第一章と、結論と課題を述べる第四章とで構成されている。以下、本論部分の議論を紹介し、評価を述べる。

ムードやアスペクトといった動詞的な形態論的カテゴリーをもたない名詞述語文でも、その内容において具体的な運動を捉えている限りは、動詞述語文と同様にその運動と現実との関係、すなわちモダリティー・テンポラリティー・アスペクチュアリティーが表現される。例えば、「さあ、出発だ」は〈勧誘〉を、「お客様がご到着だ」は〈現在パーフェクト〉を表している。とはいえ、動詞述語文に比べて形態論的な手段が限られている分、表し分けられる文法的な意味に制約があるのも事実であり、動詞述語文とは違った手段による独自の MTA 体系が存在すると考えられる。それを明らかにしようとしたのが第二章である。審査論文では、まず、モーダルな意味に注目し、〈運動〉を表す名詞述語文が、〈確認・記述〉だけでなく、〈決意〉〈命令〉〈勧誘〉といったモーダルな意味を表すことがあることを指摘している。これらの意味は、述語の形ではなく、もっぱら人称性に依存して区別される。また、権威者による行動決定の宣言という特徴があり、〈希求〉や〈依頼〉になることはない。また、運動動詞述語文のテンポラリティー・アスペクチュアリティーについて以下のように記述している。まず、運動動詞述語文には形態論的なテンス対立があるが、動詞と違って〈現在〉—〈過去〉の対立になり、状況語がなければ〈未来〉を表せない。一方、形態論的なアスペクト対立はないが、〈完成性〉〈継続性〉〈パーフェクト性〉のいずれの意味で用いられるかがほぼ語彙的に決まっているものが少なくない。テンス対立と統一され、体系的に存在するアスペクトの意味は、〈継続性〉〈パーフェクト性〉〈反復性〉である。このうち、〈継続性〉は、動詞述語文と同様、〈動作〉〈変化〉といった語彙的な意味がアスペクトの意味（〈動作継続〉〈結果継続〉）の実現に関わる。〈パーフェクト性〉は語彙的な制約が大きい、〈反復性〉はその制約から解放されている。動詞述語文との相違として重要なのは、〈完成性〉を表すのは、〈未来〉の場合か、情報構造上、述語が焦点から外れているか、ムード的な意味が変容している場合に限られるということである。このタイプの文は用例が少なく、実証的・体系的な記述を行うには困難を極めるが、大変な努力によって収集した十分な量の用例を駆使して、従来指摘されていない数多くの事実を精密に記述しており、審査論文中、最も優れた部分であるといえる。

人の〈特性〉を表すには、名詞述語文も形容詞述語文も用いられるが、審査論文の第三章では、これに加えて、「彼はやさしい人だ」のような形容詞の規定語をとる名詞述語文の重要性を指摘し、まず前半では、このタイプの文を対象として、『分類語彙表 増補改訂版』および BCCWJ を用いた大規模な実態調査を行った結果を報告している。この調査により、規定語となる形容詞と述語となる名詞のそれぞれについて語彙の分布状況の詳細を明らかにし、むすびつきのタイプを法則的に取り出した意義は非常に大きい。この章の後半では、このタイプの文のうち、「人だ」が述語になる文を対象として、そのテキスト機能を詳細に記述し、このタイプの文が《本質的な特性》という意味

と《ひきだし的な説明》という機能の統一体として、人の特徴づけの重要な表現手段として使われていることを証明した。むすびつきのタイプに関する分類は先行研究を参考にしているが、《説明されの文》と《説明の文》の位置関係や「のだ」の必須性に関しては、審査論文が独自に調査している。

以下、審査論文に対する審査会の評価を述べる。まず、総評としては、時間的限定性や名詞述語文の研究史を丁寧にフォローしながら、そこから着実に方法論を学びとり、何を課題とすべきかを見極めることで独創性の高いテーマにたどりつき、明確な目的を設定したうえで、その達成に最適な研究方法を実践し、着実な成果をあげている点が評価できる。全国学会で行った二度の研究発表では、いずれも参加者の関心を集め、活発な質疑応答が繰り広げられた。特に二度目の発表では、席上、学会長からコメントを頂戴した。また、審査論文では、申請者がコーパスや小説から長期間にわたって収集した数万例に及ぶ使用例を素材とした網羅的・包括的な記述に務めており、テキストタイプにも配慮しながら一例一例丁寧に観察が施されている。そのため、きわめて精密で実証的な記述になっている。構成や文章、形式面については、予備論文の段階から完成度が高かったが、本論文ではさらに磨きがかかっている。

審査委員からの個別の意見としては、形式名詞や文法化との関連、主語の分析、他言語の状況等にも言及してほしかったという意見や、名詞述語文の「出発だ」と動詞述語文の「出発する」の比較、運動名詞述語文が歴史的にどうやってできたかなどの検討課題の提示もあった。

審査会では、構想力、独創性、構成力、実証性、表現力のいずれの点についても、申請論文が学術論文として十分に高い水準にあると評価し、審査委員全員一致で、学位授与にふさわしいという結論に達した。